

御輿振御書

文永一〇年三月一日 五二歳

御文おんふみ並びに御輿振みこしぶりの日記た給たまひ候たごひぬ。悦よろこび入いって候たご。中堂ちゆうだう炎上えんじやうの事こと其そのの義ぎに候たごか。山門さんもん破滅はめつの期き其そのの節せつに候たごか。此等こゝろも其そのの故ゆゑ無なきに非あらず。天竺てんじくには祇園ぎおん精舍しやうじや・雞頭けいず摩寺まし、漢土かんちには天台山てんたいざん、正像めつじやう二千年にせんの内に以もつて滅尽めつじんせり。今末法けふまつぽうに当あたって日本国計にっぽんこくけいりに叡山えいざん有あり。三千界さんぜんがいの中に但ただ此このの処ところのみ有あるか。定さだめて悪魔あくま一跡いつせきに嫉ねたみを留とどむるか。小乗権教せうじやうけんけうの輩やからも之これを妬ねたむか。随まつて禅僧ぜんじやう・律僧りつじやう・念仏者ねんぶつじや王臣わうしんに之これを訴うへ、三千人さんぜんにんの大衆たいしゆは我が山破滅さんはめつの根源こんげんとも知しらず、師檀しだん共どもに破国はこく・破仏はぶつの因縁いんげんに迷まへり。但ただ恃たのむ所ところは妙法蓮華經めうぽうれんげ第七だいしちの卷まきの「後五百歳閻浮提えんぶだいに於おて広宣流布かうせんりゅうふせん」の文ぶんか。伝教大師でんけうだいしの「正像しやうざう稍過しやうかぎ已おはって末法まつぽう太ただ近ちかきに有あり、法華一乘ぽうげの機き今正けふしく是こゝろ其そのの時ときなり」の积つみなり。滅めつするは生なまぜんが為ため、下くだるは登のぼらんが為ためなり。山門さんもん繁昌はんじやうの為ため是こゝろくの如ごとき留難るなんを起おこすか。事こと々ごと紙上しじやうに尽つくし難がたし。早々げんざん見参けんさんを期ねがふ。謹言きんげん。

三月一日

日 蓮 花 押

御 返 事